

VOPバイブルスクール

基礎講座

世界の終末とキリストの再臨

BIBLE CORRESPONDENCE SCHOOL

13

- 第 1 課 宗教とは
- 第 2 課 聖書
- 第 3 課 聖書の神
- 第 4 課 人間とは
- 第 5 課 救い主イエス・キリスト
- 第 6 課 救いとは
- 第 7 課 信仰
- 第 8 課 祈り
- 第 9 課 苦しみの意味
- 第 10 課 十戒
- 第 11 課 安息日
- 第 12 課 死
- 第 13 課 世界の終末とキリストの再臨
- 第 14 課 教会
- 第 15 課 セブンスデー・アドベンチスト教会

今回学びます

BIBLE

世界の終末とキリストの再臨

SCHOOL

一九七二年、有名なローマクラブの「成長の限界」というレポートが発表されました。この報告の中で、「世界の人口や工業化、汚染、食糧生産の増加、資源の消費がこのまま続くと、今後一〇〇年以内に成長は限界に達し、人口と工業生産が突然減少し始めて、人間のコントロールが効かなくなるであろう」と主張されました。当時経済成長に酔いしれていた世界のの人々にとつて、実にショックなレポートでした。その真实性を立証するかのように、その直後の一九七三年、世界は石油ショックの危機に見舞われました。

現在では、ローマクラブの警告の真实性を疑う人はいません。砂漠化する地球、深刻な食糧危

機・飢餓問題、地球化する汚染問題、温暖化現象、爆発する人口など、今まで人類歴史において考えられなかった課題が次から次へと出てきています。ハワイの博物館には「人類の墓」が建てられ、その墓碑銘には「この種族は、自らの作り出した廃棄物と有害物と人口のために、二〇三〇年に絶滅した」と書かれていたということです。

一九九八年、柳田邦男氏は二〇世紀の諸問題を振り返りつつ『二〇世紀は人間を幸福にしたか』という本を著しました。この本の冒頭で彼はこう述べています。

「世界がこんなにも激しく揺れ動き変貌した世紀は、かつてなかった。だいいち、同時に変

動する『世界』などというものは前世紀まで成立していなかった。この世紀ならではの出来事をとらえて名称を与えるならば、二〇世紀は、世界戦争の世紀、大量殺戮の世紀、民族自立・民族紛争の世紀、革命とイデオロギーの世紀、第三世界勃興の世紀、科学技術の世紀、大量生産・大量消費の世紀、メディアの世紀、大衆文化の世紀、女性の世紀、地球環境破壊の世紀……等々、実に多彩である。

理性と科学の世紀として、期待と希望に満ちて幕開けした二〇世紀のその後の歩みは、人々の期待を全く裏切るものでした。特別に神を信じない者でも、地球の抱えるさまざまな問題を見るとき、その将来に対して危機

感を抱くのはもつともなことでしょう。多くの指導的な政治家・科学者たちは、世界の終末的状况に心を痛めています。

聖書は、人類の諸問題に対して究極的な解決がもたらされるのは、社会改革・革命や文明の発達などの人間の力によるものではなく、地球外部からの神の介入によると教えています。聖書は、キリストの再臨こそが人類歴史の最終的完成の時であると教えています。

近代日本のキリスト教界の指導者・内村鑑三は、キリストの再臨についてこう述べています。

「再臨がありて天国が現はるのであって、人類の自然的進歩、又は社会の改良、又は政治家の運動に由て神の国の地上に

現はるるのではない。余は今此等の事を疑はずして信ずるを得て神に感謝する」。

聖書の冒頭は「初めに、神は天地を創造された」（創世記一章一節）との言葉で始まっています。そして聖書の最後は次の言葉で終わっています。「以上すべてを証しする方が、言われる。『然り、わたしはすぐに来る。』」

「アーメン、主イエスよ、来てください。主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように」（ヨハネの黙示録三章二〇、二二節）。

聖書は、人類歴史は、神による天地創造をもって始まり、キリストの再臨（二回目の来臨）をもって完成することを教えています。キリスト教の歴史観は、

仏教のような輪廻りんねの思想ではありません。回るのではなく、一方向に向かつていつているのです。歴史には、はっきりした目的があり、始まりと終わりがあります。私たちはその初めと終わりの間を生きている存在なのです。この世界は、神のご計画のもとに、キリストの再臨という人類歴史の最終的完成に向かっています。キリストが来られるとき、天におけるように地においても神様の御心が完全になされるようになります。

「ご在世当時、キリストは弟子たちに再臨について約束され、次のように言われました。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信

じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」(ヨハネによる福音書一四章一〜三節)。

クリスチャンは、キリストの初臨しよりん(二千年前のキリストの誕生から復活まで)において啓示けいじされた福音ふくいんに生かされ励まされながら

裁きと救いの完成のとき

黙示録では再臨の光景がこう描かれています。それは神の怒

ら、人類救済のクライマックスである再臨を待ち望みつつ、この世の旅路を歩んでいきます。「マラナ・タ(主イエスよ、来てください)」は、使徒時代以来、各時代を通じてのクリスチャンの祈りと希望の源泉げんせんでした。

聖書において、キリストの再臨は重要な教えです。旧新約聖書を通して、再臨の約束が何回も出てきます。ある神学者は、旧約聖書では一五二七節、新約聖書では三一九節がキリストの再臨について言及していると言っています。

りと裁きの日であると聖書は述べています。

「天は巻物が巻き取られるよ

うに消え去り、山も島も、みなその場所から移された。地上の王、高官、千人隊長、富める者、力ある者、また、奴隸も自由な身分の者もことごとく、洞穴や山の岩間に隠れ、山と岩に向かつて、『わたしたちの上に覆いかぶさって、玉座に座っておられる方の顔と小羊の怒りから、わたしたちをかくまってくれ』と言った。神と小羊の怒りの大いなる日が来たからである。だがそれがそれに耐えられるであろうか」(ヨハネの黙示録第六章一四〜一七節)。

聖書は、私たち一人ひとり自身自身の人生に対して責任を持つて、神の裁きを受けなければならないこと

を教えてください。

「なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行つたことに応じて、報いを受けねばならないからです」(コリントの信徒への手紙二・五章一〇節)。

「人の子は、父の栄光に輝いて天使たちと共に来るが、そのとき、それぞれの行いに応じて報いるのである」(マタイによる福音書一六章二七節)。

キリストの裁きは厳しいものです。キリストの前に隠れたことはありません。「神は、善をも悪をも一切の業を、隠れたこともすべて裁きの座に引き出されるであろう」(コヘレトの言葉二二

章一四節)と言われている通りで

す。聖書は「正しい者はいない。一人もいない」(ローマの信徒への手紙第三章一〇節)と述べています。その意味で、キリストの裁きに耐えうる人は誰もいません。キリストの再臨は、神に逆らつてきた者にとっては、恐ろしい裁きの日になるのです。

しかし、クリスチャンにとつては、キリストの再臨は、喜ばしい救いの日となります。キリストの十字架の犠牲を信じる者は、罪の赦しをすでに得ており、再臨は永遠の命にあずかる時となるからです。

「罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです」(ローマの信徒

への手紙六章二三節)。「律法りっぽうが入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいつそう満ちあふれました。こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです」(ローマの信徒への手紙五章二〇、二二節)。

クリスチャンにとっては、裁き主なるキリストは救い主でもあるのです。ゆえに、クリスチャンにとっては、キリストの再臨は救いをもたらす希望に満ちた日です。「また、人間にはただ一度死ぬことと、その後には裁きを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人

の罪を負うためにただ一度身を献げられた後、二度目には、罪を負うためではなく、御自分を待望している人たちに、救いをもたらすために現れてくださるのです」(ヘブライ人への手紙九章二七、二八節)。

「また、苦しみを受けているあなたがたには、わたしたちと共に休息をもって報いてくださるのです。主イエスが力強い天使たちを率いて天から来られるとき、神はこの報いを実現なさいます。主イエスは、燃え盛る火の中を来られます。そして神を認めない者や、わたしたちの主イエスの福音に聞き従わない者に、罰ばつをお与えになります。彼らは、主の面前から退けられ、その栄光に輝く力から切り離さ

聖書は、人類歴史は、神による天地創造をもって始まり、キリストの再臨をもって完成することを教えています。歴史には、はっきりした目的があり、始まりと終わりがあります。私たちはその初めと終わりの間を生きている存在なのです。

れて、永遠の破滅という刑罰を受けらるでしょう。かの日、主が来られるとき、主は御自分の聖なる者たちの間であがめられ、また、すべて信じる者たちの間

すべての人に見えるかたちで

キリストの再臨の光景について聖書はこう描写しています。

「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る、ことに、彼を突き刺した者どもは。地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。然り、アーメン」(ヨハネの黙示録一章七節)。

「そのとき、……地上のすべての民族は悲しみ、人の子が大いなる力と栄光を帯びて天の雲

でほめたたえられるのです。それは、あなたがたがわたしたちのもたらした証しを信じたからです」(テサロニケの信徒への手紙二・一章七〜一〇節)。

すべての人に見えるかたちで

に乗って来るのを見る」(マタイによる福音書二四章三〇節)。

キリストは「稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来るからである」(マタイによる福音書二四章二七節)と弟子たちに教えられました。キリストは、すべての人にはつきり見える形で再臨され、救われた者たちは天に挙げられ、空中で主にお会いするのです。

キリストは、十字架にかかり

亡くなられましたが、三日目に甦られました。そして、弟子たちの見ている前で、天に帰っていかれました。聖書はこう述べています。

「イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなつた。イエスが離れ去つて行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立つて、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる』(使徒言行録一章九〜一一節)。

死人の復活と生きてゐる者の栄化

「わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられ、朽ちないものに着、この死ぬべきものが死なないものに着、この死ぬべきものを必ず着ることになります。この朽ちるべきものが朽ちないものに着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれています。言葉が実現するのです。

『死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか』（コリントの信徒への手紙一・一五章五一〜五五節）。

「すなわち、合図の号令がかり、大天使の聲が聞こえて、神のラッパが鳴り響くと、主御自身が天から降^{くだ}って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはい

つまでも主と共にいることになる予定です」（テサロニケの信徒への手紙一・四章一六、一七節）。

キリストの再臨のとき、まずキリストにあつて死んでいた者の復活があり、そして生きてゐる者が天に挙げられます。ある人たちはキリストの再臨を空中再臨と呼んでいます。キリストはこの地上まで降りてこられずに、救われる者たちが天に挙げられ（携^{けい}拳^{きん}され）、空中でキリストと出会うからです。

一九九五年、米国で『レフトビハインド（Left Behind）』という本が出版されて多くの反響を呼び起こしました。この本は、またたく間に二〇世紀のベストセラーの一つになりました。こ

の本の内容はこうです。ある日、多くの人たちが一瞬にして姿を消してしまい、他の者たちは残されて（Left Behind）しまいました。みんなの見ている中で、多数の人たちは自分の着ていたものだけを残して突然いなくなってしまうのです。世界的規模で起こったこの謎の人体消失事件に人類はバニックに陥るというストーリーです。

実は、この突然消失してしまつた人たちは、携拳されて天国に行つたというのです。そしてキリストの再臨はその七年後にあり、この神の携拳を逃した者は、この間にもう一度救いのチャンスが与えられると続きます。しかし、聖書を注意深く読むと、この携拳はキリストの再臨

と同時に起こることが分かります。また、キリストの救いの完成はこの再臨の時にあり、この時に滅ぼされる者は永遠に失われることが分かります。

キリストにあつて死んだ者は、不死のからだに復活し、生きている者は栄光のからだに変えられます。死はもはや人類を支配することはありません。「最後の敵として、死が滅ぼされ」（コリントの信徒への手紙一・五章二六節）のです。救われた者は、「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか」（コリントの信徒への手紙一・五章五五節）とキリストによる勝利を賛美します。

筋ジストロフィーという難病と闘いつつ亡くなられた難波紘一氏は、その著書『この生命燃えつくるまで』の中で次のように言っています。

「私は、やがて苦しみの本番を迎えようとしています。それでは、死に勝利する秘訣はどこにあるのでしょうか。私が平安に死を迎える秘訣はどこにあるのでしょうか。それは、私の苦しみに先立つて苦しみ抜かれたイエスさまを全面的に信頼し、この方に私の全存在をおまかせする以外にはないのです。……この、体のよみがえりこそ、私のように体が日に日に衰え、滅びていく者にとつては、最大の希望となつていのです。私は、この世ではみじめな最後を

迎えなければならず、毎日毎日、肉体の終点に向かって確実に私の病気は進行していきます。その、滅びゆく自分の肉体が、終りのトランペットの響きと共に関光の姿に変えられるという

公平で平和な世界の確立

私たちの生きている現実の世界は、なんと不公平で理不尽なことが多いのでしょうか。多くの人々が、この問題に心を痛めてきました。ドストエフスキーは『悪霊』の中で、スタブローキンをして「神がいらないから、全ての事が許される」と言わしめています。

預言者エレミヤは次のように神に問いかけています。

その一点を見つめつつ、今、すべての苦難、苦痛を耐え忍びながら、淡々と残された日々を送っていく。それが、私の喜びであり、私の希望となっていくわけです。

「正しいのは、主よ、あなたです。それでも、わたしはあなたと争い、裁きについて論じた。なぜ、神に逆らう者の道は栄え、欺く者は皆、安穩に過ごしているのですか」（エレミヤ書二章一節）。

理不尽なこの世界に住みながら、クリスチャンを支えてきたのはこの再臨の希望でした。こ

の世における苦しみや迫害に耐えながら、彼らはひたすら再臨を待ち望んできました。再臨こそ、神の平和と秩序が回復される時でした。ヘブライ人への手紙の著者は、再臨信仰に生きた彼らの生き様についてこう述べています。

「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。このように言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを明らかに表しているのです。もし出て来た土地のことを思っていたのなら、戻るのに良い機

会もあつたかもしれませんが。ところが実際は、彼らは更にまさつた故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥はじとなさいません。神は、彼らのために都を準備されていたからです」（ヘブライ人への手紙二一章一三〜一六節）。

ヘブライ人への手紙の著者は、さらに続けて信仰の勇者たちについて述べた後、彼らは、「無む一物いちもつになり、悩まされ、苦しめられ、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまざま続けた」と述べて、「この世は彼らの住む所ではなかつた」（ヘブライ人への手紙二一章三七、三八節／口語訳聖書と付け加えています。チャール

ス・エドマンは、この箇所について「神の偉大な勇者たちは、この世に住む価値の無いものかのように扱われた。しかし実際には、この世が彼らにとつて住む価値の無いところであつた」と解説しています。

この再臨の希望は、この世での辛いつら苦しい経験をしている人たちの希望の源泉でもありました。戦後の日本キリスト教会の指導者であつた鈴木正久牧師は、すい臓がんで亡くなられました。彼は、その闘病生活の中で次のように書き残しています。

「わたくしに与えられたこの世の生活が、このようにして、内臓をすっかりガンにおかされて終わるといふことは、入院当

時には実は考えていなかったこととでした。しかし今はこのことが全く神の摂理せつりであり、『神のなされることは皆その時にかなつて美しい』（伝道の書三章一一節）ことを覚え、わたくしの生活の頂点として、主とそのみ国をこのように深く真剣に思う時を与えられた恵みに感謝しております。

わたくしの肉体はやせ細り、日ごとに衰弱すわいじやくの度を加えております。すでにひとり寝返りをうつこともできなくなりました。しかしわたくしは『死を待つ』のではなく、『キリストの日』に向かつて歩みを進めているのです。この確信を得ることによって、わたくしはとても元気で過ごしております」。

死の病床にあって、彼を支え、力付けたものこそ、再臨への希望でした。この希望こそが多くの人たちに苦しみを耐え抜く力を与えてくれたのでした。死に臨んでもなお、望みについて語る事ができるのはクリスチャンの特権です。キリストの十字架の死と復活により、神は私たちに天国への門戸を開いてくださいました。キリストが再臨され、この世界が新たにされるとき、私たちの苦難の問題に最終的な解決が与えられるのです。私たちの痛み、苦しみ、そして死さえも一時的なものにすぎないことを聖書は私たちにはつきり教えています。

再臨によってキリストの王国は永遠にわたって確立されます。

「夜の幻をなお見ていると、見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り、『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み權威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え 彼の支配はとこしえに続き その統治は滅びることがない」(ダニエル書七章一三、一四節)。

新しい地とは

使徒ヨハネは、黙示録で来るべき天国についてこう描写しています。

「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなくなった。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、

再臨において、私たちが日ごと唱える「主の祈り」の「天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。天におけるように地の上にも」(マタイによる福音書六章九、一〇節)との祈りがついに成就するのです。

夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。

そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共

にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもは過ぎ去ったからである。』

すると、玉座に座っておられる方が、『見よ、わたしは万物を新しくする』と言い、また、『書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である』と言われた」(ヨハネの黙示録二一章一〜五節)。

聖書からの描写をいくつか引用してみましよう。

「狼は小羊と共に宿り
豹は子山羊と共に伏す。」

獅子は若獅子と共に育ち
小さい子供がそれらを導く。

牛も熊も共に草をはみ
その子らは共に伏し
獅子も牛もひとしく
干し草を食らう。

乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ
幼子は蝮の巣に手を入れる。

わたしの聖なる山においては
何ものも害を加えず、
滅ぼすこともない。

水が海を覆っているように
大地は主を知る知識で
満たされる」。

(イザヤ書二一章六〜九節)

「そのとき、

見えない人の目が開き

聞こえない人の耳が開く。

そのとき

歩けなかった人が

鹿のように躍り上がる。

口の利けなかった人が喜び歌う。
荒れ野に水が湧きいで
荒れ地に川が流れる。

熱した砂地は湖となり
乾いた地は
水の湧くところとなる。

山犬がうずくまるところは
葦やパピルスの
茂るところとなる。

そこに大路が敷かれる。
その道は聖なる道と呼ばれ
汚れた者が

その道を通ることはない。

主御自身が

その民に先立って歩まれ

愚か者が

そこに迷い入ることはない。

そこに、獅子はおらず

獣が上って来て

襲いかかることもない。

解き放たれた人々がそこを進み
主に贖あがなわれた人々は帰って来る。
とこしえの喜びを先頭に立てて
喜び歌いつつシオンに帰り着く。
喜びと楽しみが彼らを迎え
嘆きと悲しみは逃げ去る」。

(イザヤ三十五章五〜一〇節)

「そこには、

もはや若死にする者も
年老いて

長寿を満たさない者もなくなる。

百歳で死ぬ者は若者とされ

百歳に達しない者は

呪のろわれた者とされる。

彼らは家を建てて住み

ぶどうを植えてその実を食べる。

彼らが建てたものに

他国人が住むことはなく

彼らが植えたものを

他国人が食べることもない。

わたしの民の一生は

木の一生のようになり

わたしに選ばれた者らは

彼らの手の業にまさって

長らえる。

彼らは無駄に労することなく

生まれた子を

死の恐怖に渡すこともない。

彼らは、その子孫も共に

主に祝福された者の一族となる。

彼らが呼びかけるより先に、

わたしは答え

まだ語りかけている間に、

聞き届ける。

狼と小羊は共に草をはみ

獅子は牛のようにわらを食べ、

蛇へびは塵ちりを食べ物とし

わたしの聖なる山の

どこにおいても

キリストは、憐れみをもって罪の世界を見守っておられます。
しかし、いつかはキリストが、罪の歴史に終止符を打たれ、
罪の問題に対する最終的解決をなされるときが来るのです。

害することも滅ぼすこともない、と主は言われる」。

（イザヤ書六五章二〇～二五節）

これらの表現は、あくまでも人間の言葉で人間が分かるように書かれたものです。天国は、私たちの理解と想像力をはるか

再臨の待ち方

キリスト教の歴史を通して、多くの人たちが、再臨の時期を知りたいと思い、いろいろと推測してきました。キリストの弟子たちもキリストにその時期について質問しています。

「イエスがオリーブ山で座っておられると、弟子たちがやって来て、ひそかに言った。『お

に超えた所なのです。聖書は、「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」（コリントの信徒への手紙一・二章九節）と述べています。

つしゃってください。そのことはいっ起こるのですか。また、あなたが来られて世の終わるときには、どんな徴しるしがあるのですか」（マタイによる福音書二四章三節）。

これに対してキリストはこう答えられました。「だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、

あなたがたには分からないからである。このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒どろぼうが夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」（マタイによる福音書二四章四一～四四節）。

私たちは、あとのくらいでキリストが来られるのかはつきり知ることはできません。その日その時は、神のみが知っておられるからです。しかしキリストは、私たちにキリストの再臨の近いことを示す「時の兆しるし」に心を留めるように言われま

した。

「いちじくの木を、またすべ
ての木を見なさい。はや芽を出
せば、あなたがたはそれを見て、
夏がすでに近いと、自分で気づ
くのである。このようにあなた
がたも、これらの事が起るのを
見たなら、神の国が近いのだと
さとりなさい」（ルカによる福音書二
一章二九、三〇節／口語訳聖書）。

キリストは、憐れみをもつて
罪の世界を見守っておられます。
しかし、いつかはキリストが、
罪の歴史に終止符を打たれ、罪
の問題に対する最終的解決をな
されるときが来るのです。そし
て、公正と平和に満ちた世界を
確立されるのです。

「愛する人たち、このことだ

けは忘れないでほしい。主のも
とでは、一日は千年のようで、
千年は一日のようです。ある人
たちは、遅いと考えているよう
ですが、主は約束の実現を遅ら
せておられるではありません。
そうではなく、一人も滅びない
で皆が悔い改めるようにと、あ
なたがたのために忍耐しておら
れるのです」（ペトロの手紙二・三章
八、九節）。

「なお、あなたがたは時を知
っているのだから、特に、この
事を励まねばならない。すなわ
ち、あなたがたの眠りからさめ
るべき時が、すでにきている。
なぜなら今は、わたしたちの救
が、初め信じた時よりも、もつ
と近づいているからである。夜

はふけ、日が近づいている。そ
れだから、わたしたちは、やみ
のわざを捨てて、光の武器を着
けようではないか」（ローマ人への
手紙一三章一一、一二節／口語訳聖書）。

私たちが時を知ること、私た
ちの生きている時代がどのよう
な時代であるかを知るというこ
とが、きわめて大切です。もし
私たちの信仰が眠っている状態
にあるならば、今現実を起こっ
ている事態を察知することはで
きません。「平和だ、無事だ」
と言っている間に、世界は確実
に終末に向かってはいるのです。
パウロは、「眠りからさめる
べき時がすでにきている」と言
っています。いわゆる私たちの
見る現実と聖書の語る事実とは
ギャップがあるように思えるこ

とがあります。むしろ断絶があるときさえ言ってもよいでしょう。しかし、信仰の目を持って見るならば、聖書の語る事実こそが、究極のリアリティーであることが悟ることができます。

確かに闇が私たちのまわりを覆っています。しかし信仰の目を持って見るならば、夜は決していつまでも続くのではなく、必ず夜明けが来ることがわかります。夜明けは近づいています。だからこそ私たちは、いつまでも眠り続けるのではなく、新しい朝を迎える者としてその準備をすることが求められているのです。

「主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい

音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまいます。このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。

だから、愛する人たち、このことを待ち望みながら、きずや汚れが何一つなく、平和に過ごしていると神に認めていただけ

るように励みなさい」(ペトロの手紙二・三章一〇〜一四節)。

ある人はクリスチャンの生き方について「私たちは、主イエスが明日来り給うかのように待ち備えをするが、なおこの地が千年続くかのようにこの地を耕すのである」と表現しました。終末信仰に生きる者は、日々の生活においてキリストの再臨を心から待ち望みつつ、かつ、積極的にこの世における責務を果たしていくのです。



問題

答案用紙に解答をご記入の上、郵便かFAXにてお送りください。
郵便の場合は切手を貼ってご投函ください。

問題1 聖書の歴史観はどのようなものですか？

1. 輪廻の思想に基づいて回っている
2. 一方向に向かって始まりと終わりがある
3. 激しく揺れ動いて変貌している

問題2 キリストの再臨とはどのような時ですか？

1. キリストがもう一度パレスチナに誕生する時
2. 耐えうることのできない恐ろしい裁きの時
3. 罪に対する裁きと人々の救いの完成の時

問題3 キリストの再臨の光景について聖書はどのように描写していますか？

1. ある日突然、気付かないうちに救われる者たちは姿を消してしまう
2. キリストが雲に乗ってこられ、すべての人の目が彼を見る
3. エルサレムにキリストが現れ、救われる者たちを共に天に挙げる

問題4 再臨によってもたらされる新しい世界について聖書はどのように述べていますか？

1. 死も悲しみもない、人の理解と想像力を超えた所
2. 天は焼け崩れ、自然界の諸要素が燃え尽きている所
3. 物質的要素によらない、靈魂の故郷となる所

問題5 あなたは聖書が教える再臨の時をどのように迎えたいと思いますか？

VOPバイブルスクール 基礎講座 第13課 世界の終末とキリストの再臨

2003年11月1日 初版第1刷発行
2008年6月1日 初版第3刷発行
2013年3月1日 新装版第1刷発行
2022年3月15日 新装版第4刷発行

〒241-8501 横浜市旭区上川井町846 045-921-1416(電話) 045-921-2319(Fax)

